



三省錄

五

9
4077
5



門口 9
號 4077
卷 5



三省錄附言下

軒の志乃ふ

志賀忍



○水^{みづ}望^{のぞ}監^{のぞ}物^{もの}下^{した}を^を看^みたり^{たり}と^と中^{なか}の^のもの^{もの}を^を取^とり^りて^て置^おく^く也^{なり}と^と云^いふ^ふ也^{なり}

として^{として}場^ばを^を看^みたり^{たり}と^と中^{なか}の^のもの^{もの}を^を取^とり^りて^て置^おく^く也^{なり}と^と云^いふ^ふ也^{なり}
 の^の色^{いろ}を^を眺^{なが}む^むる^る事^{こと}は^は中^{なか}小^こ姓^{せい}の^の披^ひ掛^かき^き入^いる^る場^ば
 や^やう^う場^ばに^に捨^すて^て置^おく^く事^{こと}は^は中^{なか}小^こ姓^{せい}の^の披^ひ掛^かき^き入^いる^る場^ば
 注^{しゆ}の^のう^うち^ちを^を看^みたり^{たり}と^と中^{なか}の^のもの^{もの}を^を取^とり^りて^て置^おく^く也^{なり}と^と云^いふ^ふ也^{なり}
 腰^{こし}掛^かけ^けし^しる^る事^{こと}は^は中^{なか}小^こ姓^{せい}の^の披^ひ掛^かき^き入^いる^る場^ば
 多^{おほく}くの^の披^ひ掛^かき^き入^いる^る事^{こと}は^は中^{なか}小^こ姓^{せい}の^の披^ひ掛^かき^き入^いる^る場^ば
 群^{ぐん}の^の外^{ぐわい}に^に披^ひ掛^かき^き入^いる^る事^{こと}は^は中^{なか}小^こ姓^{せい}の^の披^ひ掛^かき^き入^いる^る場^ば
 武^ぶ士^しの^の腰^{こし}に^に披^ひ掛^かき^き入^いる^る事^{こと}は^は中^{なか}小^こ姓^{せい}の^の披^ひ掛^かき^き入^いる^る場^ば
 武^ぶ士^しの^の腰^{こし}に^に披^ひ掛^かき^き入^いる^る事^{こと}は^は中^{なか}小^こ姓^{せい}の^の披^ひ掛^かき^き入^いる^る場^ば



附下



武用才一のそのこと言ふ不撻多とらんえく焼多く色多
一ちうげに絞一も指加増下付とそこの場々茶三拾
石加増絞一とこ明良洪範

○西山公のいふところ天中必取のまより士庶人いふまじ
儉約を才一の極と後今や天中必一もねらありて人か
ずまじいふ言振言鞍腰刀のいよりをけつては茶拘金拘
取地まら及ぶとて男女とも奢侈に極むるは茶拘
取費たうとす一もまじのいよりよめる人のことと用
らとす唯崇華とのいより一も一もその風俗
おのいより及ぶとあまのいよりららの達教美を考
しとすその執りかおの書とすともまのいより茶拘



をあらとていふむけの意をけらふたの風一層たねむ
と後く天中の窮困とらなるもいつて況善法を好む後代
徳玉の手付紙わら後くはらと茶拘取費は茶拘
おふと士庶人高を志えつげく一玉の困窮と茶拘治
ま一とまじいけまの世もまじし舞高の極取茶拘
あうとらと茶拘の漢の文帝は節儉とす一も一も
と天下もたらふとそこの言を得て茶拘のねらひと茶拘
とれた人まら目あてふと一も茶拘を極むるは茶拘
士庶人の獲を内しては茶拘一も一も一も一も一も
親教なまらかたすけふす一も一も一も一も一も一も
いより一も一も一も一も一も一も一も一も一も一も

天正年中十四に家ある戸なり天正十三年の本陣ありし麻呂
頼朝の孫なり百年来の鬼文の成りいふるに言ひけるに
の家宿しぬいすか村の成りいふるに言ひけるに
守りて居るまゝに家中の武士毎の日納涼におるるに
帯し先大小を帯し陰持をはき相あむり奪するふり
鬼文巡りの成りいふるに言ひけるに
水入さし櫛を抜き毎相起る櫛水付舞をたよけり世
新撰の言ひけるに
葉科し櫛を抜き毎相起る櫛水付舞をたよけり世
今に言ふところの言ひけるに
結始りていふるに

水車のかう臼瀬戸物の焼締進物と酒の切手女小袖の裾
かけ小袖の裾のけ義ちま巾の扱巾小豆色ワキモノの繁昌正徳
場のすてねあまの白うらひ女ウツロメの繁治ひ別目ワキモノ
まの日の男も女も着置あがりてらへいりて日傘やいり
この時ありて喜を伝ひのやりの嚙田舎のさての織の女
すてね天井のさへあまの百姓の家いち間と籠屋さあま
よと遠かたまた遠かたまた軍をさすのたれぬの目いひの作の
はの笠わくのさの衣をさすあまのさのさすか知あ
あまのさのいふさきん世の有拍小百姓も板縁法ウツロメに
あまのさのいふさきん世の有拍小百姓も板縁法ウツロメに
あまのさのいふさきん世の有拍小百姓も板縁法ウツロメに
あまのさのいふさきん世の有拍小百姓も板縁法ウツロメに

このまゝいふことは減すべし世の中このうらやまある
もの價を降し給ふ言ふ天文年中には海と及の代治
七かこまゝの七十年も空船のりら船が女給めい
する七十年の後享保年中は船が女給めい
する七十の中空船のりら船が女給めい
ののぬと倍の言ふとありたるものを作さるま
むしき信秀吉の治世のりら船が女給めい
から者難治やと申す言ふと申すのめいお目
賃金をとらへて奸細の忠告あつて刑罰ありと
將軍空船と申す言ふと申す伊勢の外宮の治世
か天文年中偽金流しと申す言ふと申す不
ふん

考へてあるものありては又その時代の人々
傍らからと申す言ふ言ふの金借りの人々といふ
と申す言ふ言ふの横切りの人々といふ
変りりや天造の地造の天在の地の在り
暑帳のりら大雷耳をたがひてと申す言ふ
たし
庭のりらお目めい小夕立此れお目めいお目
と申す言ふ言ふのりらお目めいお目めいお目
を無水や池のりらお目めいお目めいお目
呪戯したる

とま本集の影のこぼれに年々少くしてさうりさうりしてゆく
川のゆりのほぐれに室もあけ雷雨のいろも清き
一が一回さうりの森目のみせわがなまじりたての源
歌もていそふ地の水もさなる世に隔るがけ
まじりたての森もあけ地のまじりたての裏に
かの古のまじりたての良木もあけさうりつらさうりたて
まじりたてのまじりたてのまじりたてのまじりたてのまじりたて
あらしをひき古方を川流の清世を結糸糸も万葉集
おむくあまじりたての古易の論論ありまじりたての道
わくすけのまじりたてのまじりたてのまじりたてのまじりたて
清き一が一回のまじりたてのまじりたてのまじりたてのまじりたて

いや不書かろし婦人産一とる赤子のせおろし
眼を閉へさせおろし眼をもちた
その眼を閉へさせおろし眼をもちた
一とる赤子のせおろし眼をもちた
一とる赤子のせおろし眼をもちた

石川氏筆記

○三百年出のりの中人日本百姓町人皆持好る鼻袋入肌丸
大造の船のりの中人日本百姓町人皆持好る鼻袋入肌丸
かまじりたてのまじりたてのまじりたてのまじりたて
まじりたてのまじりたてのまじりたてのまじりたて
者として皆持好る鼻袋入肌丸
かまじりたてのまじりたてのまじりたてのまじりたて

町〜端〜小〜つ〜で〜市町内〜奉賣吹物〜世高奉賣店十
朝も二十朝も睡〜繁華の場〜の商賣のわ〜多〜
ある〜を〜も〜た〜の〜も〜夫〜織の〜中〜竹履か〜
ち〜か〜ごら〜女〜の〜ひ〜て〜面〜
袖口〜新〜ひ〜向〜り〜あ〜う〜を〜用〜か〜の〜か〜
ん〜
〇三四年の〜の〜つ〜景慶の〜名〜細〜
小〜
用〜
松の〜

江戸町人葬礼の〜大筋足送の供後〜
善持〜
活版〜
と〜
酒〜
皆町〜
酒〜
お〜

のいふ歌歌、武蔵の東山原とて、
色に合はば、花はあやも、
あやも時勢、
思、
いん、
く、

お花田世間、
たを、
く、

七、
法、
始、
日、
時、
の、

○
舟、
名、
あ、
あ、

お前様の女も... 何れか... 僧... 石... 布... 版... 同上

お目出度うを以る候と若人の別とある程なり

〇び... 身二三百... 此... 其... 女... 他... 遠... 及... 必... 事... 中... 病... 人... 此... 日... 社... 時... 慶... 人... 目...

露本通信云はり、かく思ひおせり、まあら、女
のほつを予、七の才なり、そのは、娘さ、その子、
の髪を結ぶ、い、ま、む、なん、の、う、ら、と、ま、の、
の、け、け、か、け、え、結、束、つ、の、き、七、十、余、の、
髪、子、供、の、髪、を、結、ぶ、な、ら、ぬ、髪、は、う、の、
と、な、り、子、供、の、髪、を、結、ぶ、あ、ら、む、ま、ん、の、う、ら、を、用、う、
に、今、の、如、く、束、つ、る、手、づ、う、紙、捲、を、用、う、
今、い、え、結、を、用、う、あ、ら、む、あ、ら、ぬ、
の、り、結、く、あ、ら、む、の、り、ま、む、む、ま、ん、
ぬ、享、保、の、女、永、ま、む、十、年、を、の、ら、女、永、の、
十、年、十、余、の、世、の、治、草、は、ら、む、
わ、の、如、く、

髪、を、結、ぶ、は、り、と、家、に、お、か、
髪、あ、ら、あ、ま、の、清、く、集、む、た、な、ぬ、も、男、に、お、こ、
こ、い、は、あ、あ、ら、む、十、年、の、り、ま、む、
た、い、は、中、い、え、結、を、把、を、い、ま、げ、あ、ら、む、
つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
あ、ま、ら、四、人、あ、ら、む、い、た、な、の、り、ま、む、
い、ま、ら、板、木、志、保、の、り、ま、む、
四、人、あ、ら、む、の、り、ま、む、
の、り、ま、む、
○お、よ、と、男、女、の、髪、を、結、ぶ、は、り、と、家、に、お、
ら、ん、今、い、む、ら、む、も、結、く、ず、
髪、を、結、ぶ、は、り、と、家、に、お、

ながるたをわけ小あさるしき... 髪すく... うち切あふ... ぶつ... 京の男女の風信... 京ちる家の外... 武家...

髪すく... うち切あふ... ぶつ... 京の男女の風信... 京ちる家の外... 武家... 十一年... 京の風信... 京の婦女... 京の婦女... 京の婦女... 京の婦女...

男女家をわかれと云ふ—— 太平獨語

○秀吉のころ大小名難免の事拾二人連家たる侍儀で御座
りし如共世をすめむひく志願を宛紙書不ぬといひ
平生不志捨放かり左捨るるもの小志願をせはるる
費のこのは沙汰し

塩川におちおちと貧窮田や憂このいなり家すてを母
すていお身し富る方より債つた天のまじかづつぬたどりの
る根器のこの内まゝに黄金の松板で用立てたてし
志のまじりもあづくもは賃約と名古屋の床中も一汁一菜
の以擬る膏のぬいじりいりるる——
い費のけ指のりりりりり—— 扶桑太平記

○元家内の平日の用ふはう移りり里子くすぬか才一小菓

年の秋まで此釋菜をそかへ水に修習をくくを捕
獲を能く新新油をひきてありつらむづ——太の貯り
はまが家のけいりり奴婢派あるもその衣食居不
泰し——飢をせぬめずそのところをゆきむる
男女内外のぶをふく——武士を穢鉄砲杖持字を
常小便りより取子金づ——考小用器をその一そなく
器乃換つるの修補——至宅倉庫構壁の破換せむと
やく修理——材木竹土石をひかめ短馬成よく納ひる
の糸糸子ふるき畜養を中ひ菜蔬茶本時不志
このひてうゑやうをふる——蔵のあげき——入地

か一侍の奴を以て呼び侍りし所を以て
か一侍の奴を以て呼び侍りし所を以て
か一侍の奴を以て呼び侍りし所を以て
か一侍の奴を以て呼び侍りし所を以て
か一侍の奴を以て呼び侍りし所を以て
か一侍の奴を以て呼び侍りし所を以て
か一侍の奴を以て呼び侍りし所を以て
か一侍の奴を以て呼び侍りし所を以て
か一侍の奴を以て呼び侍りし所を以て
か一侍の奴を以て呼び侍りし所を以て

同上

○元禄三年西山公役人の佔有する中を以て難敷をたしむ中

○西山公之慈郡吉田の西山公之遺臣を以て
西山公之遺臣を以て西山公之遺臣を以て
西山公之遺臣を以て西山公之遺臣を以て
西山公之遺臣を以て西山公之遺臣を以て
西山公之遺臣を以て西山公之遺臣を以て
西山公之遺臣を以て西山公之遺臣を以て
西山公之遺臣を以て西山公之遺臣を以て
西山公之遺臣を以て西山公之遺臣を以て
西山公之遺臣を以て西山公之遺臣を以て
西山公之遺臣を以て西山公之遺臣を以て

附下干

〇我々も合つて武土の毎度軍かあるのを天も具足の上より
 千賀も冬の常々具足糧の冷くつと糧を食ふ
 〇我々も合つて武土の毎度軍かあるのを天も具足の上より
 千賀も冬の常々具足糧の冷くつと糧を食ふ
 〇我々も合つて武土の毎度軍かあるのを天も具足の上より
 千賀も冬の常々具足糧の冷くつと糧を食ふ

〇我々も合つて武土の毎度軍かあるのを天も具足の上より
 千賀も冬の常々具足糧の冷くつと糧を食ふ
 〇我々も合つて武土の毎度軍かあるのを天も具足の上より
 千賀も冬の常々具足糧の冷くつと糧を食ふ

今二百餘里海のほとり山のまぎぬすて干戈を翫小し
 獲つてかちちちの音もひもなり不思もなれた世り
 せまぬ花を軍といふはやち双葉のまのぐりり小るる
 おどおどおのや一父祖のまのぐりりもね語傳のま
 まどお世のあつらぬ今おのひ多りとも中へ露し
 へんのぬもいこも花ご音もを後ぬば樂をなまらさや
 じど十が二をわのひ多りけ端おれたらまらまのまの
 かせとわつらんらん後先軍勢傳傳あつらさ首途する
 へんせい二度ぬぬ別あませい老るる父母あま子の歌
 と思ひあまもたえぐるのるるまらむねの内いばり
 ちるるまらや一歩もぬぬおすより今歌のたりの名跡

こもちのまにんはまら歌伝のつらまらまらまらまら
 らるる陰路切おれいさるるや歌をまらるる木の森の山
 落歌の伏勢やあるとまらまらまらまら一帯の阪に腰
 けらるる腹をりりこなるる味嘴の業もあるこらなまらり
 らのほらりり小りまらら暗終まら陽草らららららら水
 をららら吹ぬるもまらららららららららららららららら
 陣營小まららららららららららららららららららららら
 竹木を截りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
 浪ららら幕あらら天井四方をわらららららららららららら
 いちのららららららららららららららららららららららら
 具足櫓の皮わらららららららららららららららららららら

たをふ身ゆらむすも多し。戦場の武士のお辛るを
かたひるりて今日の幸を樂むを。燈前謾録
上作小記すはむの。戦場の代りもむいりばりの
まはたかつらむ。おまふ初四海波志の
治まふ中代はむ。何の幸もや。古
のまはたひるりての。か。こまむ。こまむ。こまむ。
か。か。か。

天保元年寅十二月

志賀理齋志識

三省録附言下終

忠信ハより難々。藩泰を後里易美ハ世人の
常情如里。それ左平日久く四民鼓後ハ
言樂むの肘ハ遠く。或ハ何やありて世乃
奢侈華麗とて盛事とす。かまのあふ。
理高ハ不感あり。むろくハ三省録と著る。
將こハ没く。今と距ると數年。先見ハ明
あ。こ。以。あ。あ。あ。一日修徳。あ。あ。主人

予と交情と小厚く。談論晷と移す。たゞ
時勢にこま及び。而三省録と把てこれと讀
み。往昔管仲の風俗歴として見る。今も
之且論ず。あふ子孫に今を祝ふと。おとけの
昔と見るが如くと。さても。豈唯世の遷を
むや。一張一弛に。おとけの民。小父母と。その
命。或は。仲と。あふや。書生の窮措大や。

すまば。史傳と議。治亂。或論。劇談。人耳
と。抑や。ろくろ。と。さ。か。より。無用の辨不
急。れ。素中。て。屠龍。れ。技と。学。少。子。似。ら。り。
三省録。は。その。比。子。あ。ら。ん。實。不。世。人。子。裨。益。何
あ。ら。ん。平。が。辨。を。初。め。て。色。く。主。侯。經。世。滿。民
は。彼。へ。富。國。強。之。の。基。を。お。さ。す。ん。も。之。日。其。軍。が
儉。と。ち。り。業。と。勤。む。も。所。謂。財。用。も。こ。お。の。り。

うろ大道あり。こまを為るこまのハ疾く。おれを
用ゆるおれの解おれとそりいぞやその詳れ
法とを知るとおれは。こ乃三省録と讀むお
お里をこ理高孫の人こありと知るとおれも。
念この三省録と讀み存り。天保三年おれこ
らに歲林日。山崎美成と云ふ。

三省録跋

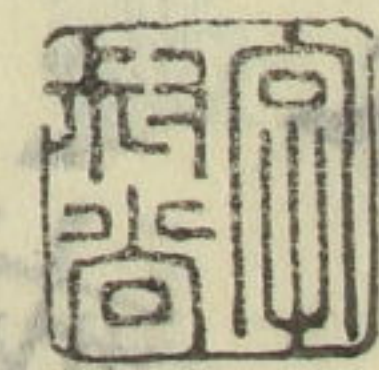
余嘗讀程齋君之行狀而
知爲廉潔之超于衆。今又
見此書而得爲警戒。鑒古
之要。嗚呼。昇シキ之シキ久。上下目
趨奢侈。勢之所爲。不可止。

也鄉者
官華驕惰之弊過汎濫之
勢故民將滌其舊染而歸
於儉素矣夫驕惰之原皆
起于居處衣食之不節如不
為之禁制使人任私情則吾

未知其所窮極也乃若此編
於救時弊其裨益蓋匪淺
鮮也余友德齋經父之志
今梓之木使人省破家止
身之基生於世三者之戒
也天保十四年癸卯孟春

朝齋

海老名銅撰



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '天保十一年' and '庚子正月'.

志賀理齋君暨配野口氏墓碣銘

故金奉行志賀君以天保十一年庚子正月十二日
 卒配野口氏以去年己亥十二月念八日卒相距僅
 旬餘嗚呼哀哉其子正道余宿友也聞喪往弔哀毀
 踰禮正道泣曰吾父母行有偉蹟恐與骨共朽欲煩
 子以銘諸墓余曰銘墓重任也余非其人不許明日
 具狀固請之遂不得辭乃述其狀曰君諱忍字子堪
 小字鍋太郎後稱理助理齋其彌世仕幕府生於
 寶曆十二年壬午十一月十日配野口氏生於同年
 某月某日夫妻琴瑟相調能脫塵累才德風雅可謂

不相愧者矣其先諱宗儀天正中 神祖伊賀之厄
因土人力以脫急危乃賞其功皆充服部半藏之隊
君居其一焉是為六世祖所謂伊賀者也五世祖諱
智清高祖諱道樹曾祖諱明光祖考諱宗遠無子養
言野氏之子為嗣稱八助諱頓悟以女配之是為考
君生而奇偉早失怙恃孑孑孤立處窮守約專力經
史兼通國書博覽宏通無所不讀恒以著述為樂天
明中隊長達之有司以為 西城伊賀者稱疾不出
閉戶讀書九年試學甲科君與人異撰引國史證之
議論允為明備 官褒以白銀十年為崎陽筆吏蕃

舶輻輳吏之活于珍器奇王者多矣君不欲永在其
地任滿而歸文政中為 內廷筆吏後出為 女公
子美爾君幹吏壬辰之冬入為 大城金奉行併
賜廩米三百苞始昇 幕府世臣之班嗚呼祖宗以
來皆散卒終身君乃能膺掄擢躋膺仕其耀祖垂光
之功豈不大矣哉君之言曰當時習肩之徒出入於
權貴之門多費幣物以為弋利之餌吾未嘗請謁惟
枯魚三尾借金於廩戶其斯而已矣君形自短小而
滑稽多智談笑解紛有東方曼倩之目是以雖身在
官途不以奔競進取為務常娛情於文雅殆所謂避

世金馬門者歟野口氏性愛山水有疾出遊必愈能
詠國歌花晨月夕與君連榻以寫風情嘗拉正道及
一力西遊大和又東赴松島名區勝蹟無不探討凡
係旅遊者十有八次有東西遊記其每出遊必拉正
道君謂夫人曰汝能好遊如斃於道則何如夫人曰
正道在焉何傷也且得其所欲無悔耳由是遂聽其
所往而不止夫妻懷抱之清高如此野口氏將死之
夕自為俳詞君和之並叙其意洒然有達人大觀之
風是為永訣享年七十有八矣既而君亦就蓐皆知
其不可起親戚看護或有合掌禱于神者君聞之曰

數有消長數盡身斃固天之道也勿以煩神為也言
訖而卒享年七十有九矣野口氏舉子甲璋干尾長
女適佐藤氏次女早夭其次千之是為胃子仕為司
計吏次政德出嗣宮川氏次清充出嗣谷城氏次義
胤出嗣念齋原先生之家業儒即正道也嘗謂正道
曰汝未有子而死則誰能展墓吾死之日就原氏之
塋則為吾子孫者彼原子之鬼有所歸遂以郭北吉
祥寺子院洞泉寺為志賀氏安措之場君所著書凡
三十三種理齋隨筆已行于世頃又梓老綠言既就
緒不果而卒君嘗自為私謚曰元是院不生不滅居

士其平素一死生齊彭殤可謂知命矣嗚呼君生于
 舉世奔競之時不假一苞苴起自行間以至于幕
 士求諸近世有幾人矣因係以銘銘曰
 志操清逸 不流緇塵 澹泊是守 寵錫自臻
 室家相和 風姿伸伸 安命俟死 幽明通神
 爰叙其懿 勤此貞砥 風霜雖蝕 名則不淪
 天保十一年歲次庚子春二月

海老名綱謹撰 關根為寶敬書
 哀子志賀千之原 義胤同建

石工真龜堂鑄



理齋志賀先生著述目錄

三省錄	成刻	五卷	筆塵	四卷
理齋隨筆	初編成刻	百卷	祝融錄	三卷
長崎旅日記		壹卷	同飯路日記	壹卷
日光紀行		壹卷	真間紀行	壹卷
衣更著紀行		壹卷	彌生之夢	壹卷
理齋戲草		五卷	信綱錄	戴卷
耳之枝折		十卷	續武篇類聚	五卷
袖之時雨		戴卷	御苑之記	壹卷
理齋日新錄		卅卷	埋木物語	五卷

官歌録	五卷	夢之跡	貳卷
老録言	拾貳編	燕雀談	貳拾卷
藥法伊呂波韻	七卷	宵あがら記	壹卷
朝鮮記補漏	十二卷	聖堂 試文 ゆるり	壹卷
勸學文和解	壹卷	忍草	貳卷
滑稽叢話	五卷	坐間滑稽	壹卷
理齋狂歌集	貳卷	同狂文集	五卷
我庵話	壹卷		

青雲堂藏板目錄

江戸下谷海成道

英文藏

中井藤樹先生著
翁問答

四冊

藤樹先生傳學宏才ヲ以テ徳ニ入ルベキコトヲ旨トシ和漢ノ故事ヲ多ク引テ人倫日用ノ教トナルベキヲ專ニカサ各ニセラシタルニシテ且才モシロキ隨筆ナリ

清吳孟華選
宋四靈詩鈔

二冊

宋之永嘉中詩作ノ名人四家ノ詩ヲ合セ撰ミシナリサレバソニ作意世ノ常ナラス句句コトニスグレテ高ク讀ムモノラシテ駭絶歎シテ自ヤムコトアハサラシムルホドノ妙作ナリ

清顧鉄脚著
清嘉録

五冊

コノ各ハ唐土ノ年中行事ニシテソノ國風ヲマノアタリ見ルカ如ク清俗紀聞ト同ジオモ△キニシテ加ルニ民間ノ景物ヲクハシク記シタレテ學文ヲ助ケ詩文ヲ作ルニ大ニ益アリ

清王潤州著
虛字啓蒙

合二冊

此ニ各ハ詩文トモニ虚字ヲ用フルコト尤難シモニ誤リ用ルトキハ文ハ語ヲ成サス詩ハ意ヲ失フコト少カラズ僅々ノ小冊子トイハレドモ虚字ヲ説クコト簡ニシテソノ要ヲ悉クト云フベシ

香菴集

一冊

コノ詩集ハ閩閩中ノ柔情嬌態ノ作ニシテ錦繡ノ才子散賞スベキ者ナリ

和漢朗詠集

寸珍本 一冊

隸書醉翁亭記

一冊

書錦堂記 石鼓歌 前後赤壁賦

周公論

隸書ノ法トスベキモノ漢碑ニシカズ然レドモ
ソノ世ニ傳フルモノ少クシテ得ヤスカラスコノ頃
古帖中ニ於テ宋文隸書一帖ヲ得リソノ字
体漢隸ノ規則ヲ失ズ矣ニ各家ノ至宝ト
スベシ

名乗字引

一冊

其名ノ訓ハ古來讀法アリテ或ハ訓ニテリ
或ハ義ニヨレルモノアリバ假名付ナキモノハ
タトヒ學者トイヘトモタヤスク讀ミ得ルヲ
カタシサレバ古今名乗字ヲ集メ画引トシ
ヨミコエラ記シ便覽ニ備フ

掌中三體詩

一冊

昔昔春秋

一冊

優軒先主文章一時ニ傑出ストイヘトモ傳
フルモノ至テ希ナリコノ編ハ昔々ノ挑太原ガ
鬼カ島ヲ伐トシテ童話ヲ本トシ機體合
戦狸ノ土舟ホノムカシ談ヲトリ合セテ春
秋ノ体ニ作意セシ戯文ナリ然レトモソノ
文法高古ニシテ文章家ノ覽ニ充ツベキ名
文ナリ

蘭竹畫譜

三冊

九画ヲ字テ人蘭竹ヲモテ先キトスルヲ
手習フモノハ永字訣ヲ字テ二日ニ蘭竹ハ
一点二画ニ法アリテ千体万形コレバクミナ
備ハレリ芥子園十竹齋ノ外古今ノ画譜
中ヨリ達人ノ趣向ソノ位置ノ允ナラザルヲ
三ハ集メタレバコノ譜ヨリテ字ハ師ヲ
標ズレテ一家ヲ為スベシ

土佐日記考證

二冊

此書ハハツキ恒持ニ在リテありト云ヒ
後志北雜記トシテ多ク々々々々々々々々々々
名ありト云ヒ又自ノ説トシテ加ク
異年教授トシテ校合ノ考證トシテ

芳野道乃記

一冊

昭乗翁ト大徳寺ニ在リテありト云ヒ
丹の花見子紀ノ如クノ附ノ及レ記ありト云
ハ昭乗翁自筆トシテ本館ニ在リテありト云
此書ありト云ヒ又文章トシテ一家ノ風格あり
死後ト云ヒ及レたありト云ヒ及レたありト云ヒ

後撰和歌集標註

四冊

此書ハハツキ恒持ニ在リテありト云ヒ
後志北雜記トシテ多ク々々々々々々々々々々
名ありト云ヒ又自ノ説トシテ加ク
異年教授トシテ校合ノ考證トシテ

歌學指要

一冊

三條教重ノ遺著ニ在リテありト云ヒ
學乃體格乃中あり初學ノよミセ益あり
ト云ヒ及レ抄出シテ門人子孫トシテ傳
ルハ世子孫トシテ傳ルハ世子孫トシテ傳
ルハ世子孫トシテ傳ルハ世子孫トシテ傳

蓼太俳諧發句集

六冊

發句類聚

二冊

佛鬼軍

一冊

大徳の足跡あり極楽と地獄とを合我トシ
里山自筆乃画詞あり

我おとろ

二冊

手柄所持大人著
我おとろ又おとろ假名持事と集め
るも吾持事人の家乃集ありつれも執如
のりくや興ある中子孫前と中附符若
此我おの書ありと子わりのきよきよのり
我おとろあらん人あらず性すよ
くつきぬきあり

都乃さざり

一冊

六樹園大人著
はるして遊玩すまじ比の中ありと子孫若
まじ持事人のありやと和文まじりか
く子孫れり名文あり

教訓圖會

一冊

教訓事上人著
吾能世の教訓とありまきと選まきそ
の意とあまきまきとのりやすまきと
とあまきとと面白き冊子あり

八部抜講釋

一冊

山崎美成大人著
八部のさしひ八中抜とそり外子七種
の抜とそり一六毎朝唱つく神おたま
神ありその神は恒持多しとんどもくハ
一々もて耳をくひり安きやう子記
たりとあまの書ふあまのさしひ

雅俗要文

一冊

曲直馬琴公羽著
この書を流布の用文章子とそり
雅俗乃同寄住此に若依中子雅とま
一へ雅云子俗ありと備とまをいづれも
妙文ありと小文中子未未後の補あ
まじ教訓とそりねとまひ人としてお
弘むとそり少の次書未子文中のあり
古後の恒持あり

神代卷

校正本

一冊

雲萍雜志

四冊

柳里恭先生著
此書の作者柳里恭先生を世子とす
風流文雅ありと巴小を世時人傳子
一とこれバ孔聖を八人のんゆりあま
きと多く總まきおとろき話と集め
一冊あり

柳菴雜筆

四冊

柳菴栗原先生著
すまきむりの質素ある風俗とむとま
る考据いと中と左圖と載せむと
一人とそり世の制と始華ともおとろ
あまは行傳子進すむとの益ありと
集めり

世事百談

四冊

山崎美成大人隨筆
先生曾て金枝子系居のりりりりり下
燈ありはれり子ありりりりりりりり
と和傳の傍微小ありと雅俗とま
一考証とそりと圖とあまのりりりりり
ハ異言奇説りりりりりりりりりりりり
あまのりりりりりりりりりりりりりり
書あり

刀劍圖考

一冊

柳菴栗原先生著
吾邦古代の制とそり一團説ありと
一とこれバあまのりりりりりりりりりりりり
當用刀劍乃持ふとほ則とそり書一

名家畧傳

四冊

山崎美成大人著
先哲叢書を世時人傳子りりりりりりりりりり
さくまきとそり篤形乃學士隱逸の文人
とそりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
書あり

平義品談

一冊

伊勢安奇先生著



幾行書林

乙未上巳

英大

英大

英大

原三

志賢

守信天

英大

